



南海地震を知る
徳島県の地震・津波碑

日本最古の津波碑：1364年正平南海地震津波の供養碑「康暦碑」 徳島県海部郡美波町東由岐

徳島県

〔監修〕

徳島大学環境防災研究センター



南海地震を知る 徳島県の地震・津波碑

目次

◆ 巻頭のことば	P1
◆ 南海地震を知る	P2
◆ 徳島県の地震・津波碑	P8
◎ 徳島県の地震・津波碑の位置	P8
◎ 板野郡松茂町	春日神社「敬諭碑」 P9
◎ 徳島市	蛭子神社「百度石」 P10
◎ 名東郡佐那河内村	長願寺「扁額」 P11
◎ 小松島市	「立江川排水改良事業之碑」 P12
	立江八幡神社「農地災害復旧碑」	
	豊浦神社「石碑」	
◎ 阿南市	鵠和光神社「石碑」 P15
	大原「地神上棟式記念碑」	
	住吉神社「海嘯潮痕標石」	
	八幡神社「常夜灯台石」	
◎ 那賀郡那賀町	妙法寺「庚申塔」 P19
◎ 海部郡美波町	志和岐「震災碑」 P20
	東由岐「康暦碑」	
	東由岐浦「修堤碑」	
	西の地「貞治の碑」	
	木岐王子神社「石灯笼」	
◎ 海部郡牟岐町	旧旭町南海地震「記念碑」 P25
	「牟岐町における南海震災史碑」	
	牟岐「大震潮記念碑」	
	「牟岐町南海震災記念碑」	
	出羽島観栄寺「石碑」	
◎ 海部郡海陽町	浅川「南海津浪死没者 供養塔」 P30
	浅川天神社「折損鳥居」	
	浅川天神社「石碑」	
	浅川天神社前「南海大地震記念碑」	
	浅川観音堂「地藏尊台石」	
	浅川観音堂「宝永ノ津浪」	
	浅川観音堂石段「津波襲来地点石標」	
	「震災後50年南海道地震津波史碑」	
	「津波十訓」	
	浅川御崎神社「大地震津浪記」	
	浅川千光寺「大地震津浪記」扁額	
	旧熟田峠地藏尊「供養塔」	
	大岩「慶長・宝永地震津波碑」	
	鞆浦「海嘯記」	
	宍喰「南海地震津波最高潮位石標」	
◎ その他	南海地震津波「最高潮位標識」 P45

巻頭のことば

次の南海地震は今世紀前半にも起き、そのエネルギーは1946年昭和南海地震の4倍以上、徳島県での死者数は4,300名、建物全壊棟数は49,700棟と予測されています。徳島県民総ぐるみで、次の南海地震に立ち向い、被害を最小化することに努めなければなりません。

この冊子には、県内各地に残る過去の南海地震・津波に関する記念碑、供養碑や扁額など（以下、総称して碑と呼ぶ）の調査結果がまとめられています。碑には、犠牲者への供養とともに当時の被害を後世に伝え、二度とこうした悲惨な被害を後世の人々に味あわせたくないという先人の思いが込められており、その心を私たちは受け継いでいかなければなりません。

徳島県には、他に例をみない古い貴重な地震・津波碑が多く残されています。すなわち、太平記にも記された日本最古の津波碑といわれる1361年正平南海地震や1605年慶長南海地震をはじめ1707年宝永地震、1854年安政南海地震などの地震・津波碑がそれらです。さらに、終戦後間もない1946年昭和南海地震直後の碑に加え、外国で発生した1960年チリ地震津波の津波高を印した碑など、近年建てられた新しい碑も見られます。

これらの碑には、今後の地震・津波防災に生かすべき有用な多くの教訓が刻まれています。しかしながら、碑面が風化・摩耗して碑文が読めなくなったものもある一方、先人の思いを継承するため碑文を再度蘇らせ新しい碑を建立している地域もあります。ここに取り上げられた碑以外にも、県下各地にはまだ地震・津波碑が存在している可能性もあり、この冊子が埋もれた貴重な碑の発見の契機となることも期待されます。

この冊子には、1) 碑の名称、2) 過去の南海地震の名称、3) 碑の所在地と地図、4) 碑の写真と碑文の概要、5) 碑から得られる教訓などが記されています。

この冊子を手し、現地を訪ね、当時の被害に思いを馳せ、碑の教訓を生かし、次の南海地震に立ち向う心構えの一助となることを期待したいものです。また、学校や地域における防災教育・防災学習にも活用していただきたいと思います。

今では、もとの湿地や池、塩田などが埋め立てられ、地形や土地利用の形態、社会構造も過去の南海地震時と大きく変化していて、被害の形態も複雑、その規模も格段に大きくなることが考えられます。そのため、次の南海地震発生時には、自助・共助・公助の機能を最大限に発揮し、被害を最小化するとともに、早期に復旧・復興できるしくみを県民総ぐるみで考えておきたいものです。

先人の叫び、過去の教訓を現在に生かす知恵のヒントがここから得られることを望みます。

2008年2月

徳島大学名誉教授 村上 仁士

南海地震とは？



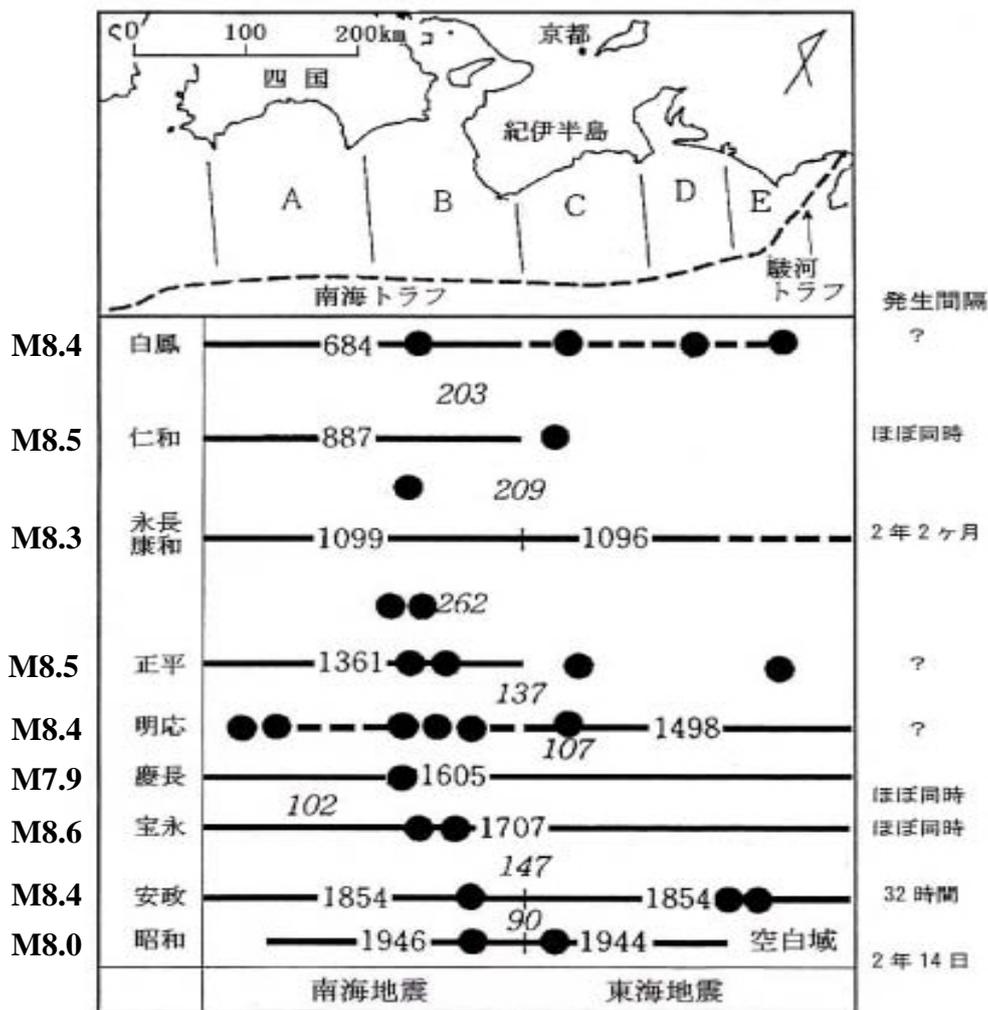
南海地震とは、紀伊半島潮岬沖から四国足摺岬沖を震源とする海溝型地震をいいます。海側のフィリピン海プレートが陸側のユーラシアプレートの下に沈み込み、プレートの沈み込みに伴う陸側のプレートの変形が限界に達し、境界面が破壊されるとき巨大地震が起きるといふしくみになっています。東南海地震は、遠州灘西部から紀伊半島南端まで、東海地震は、駿河トラフ沿いで発生する地震です。なお上図には、南海地震・東南海地震・想定東海地震の震源域を示しています。

これら3つの巨大地震は、歴史的にみて連動する特徴があり、およそ100～150年毎に地震のマグニチュードM8クラスの地震が起きています。最も新しい南海地震は、1946（昭和21）年に起きた地震で、その2年前の1944（昭和21）年に東南海地震が起きています。

政府の地震調査研究推進本部によれば、南海地震の発生確率は今後30年以内に50%程度、50年以内に80～90%と発表されており、今世紀前半には必ず起きるといふ心構えが必要です。また、内閣府の中央防災会議の被害想定によると、東海・東南海・南海が同時発生した場合、M8.7の巨大地震となり、最悪約28,300名の死者が発生するといわれています。

過去の東海・東南海・南海地震

出典:「中央防災会議」



● 遺跡発掘調査から確認(寒川らによる)

この図は、過去の東海(E)・東南海(C,D)・南海(A,B)地震の履歴を示しています。徳島県でも、有史以来幾度となく南海地震による被害を受けてきました。その被災履歴は、古文書や碑などの歴史史料や遺跡発掘調査による噴砂の跡、さらに地下の津波堆積物などからも確認できます。記録に残る日本最古の津波は、日本書紀に記された684(天武13)年の白鳳南海地震による津波で、高知県では貢物を運ぶ船が多数沈没しています。この地震による噴砂の跡が徳島県板野郡黒谷川郡津頭遺跡から発見されています。また、文書になかった1498(明応7)年の明応南海地震も板野郡の宮の前遺跡の噴砂の跡から確認できます。

過去の履歴から南海地震には2つの大きな特徴があることがわかります。1つはおよそ100~150年間隔で発生していること、もう1つは東海地震および東南海地震と同時もしくは少しの間隔を空けて発生していることです。

南海地震・津波の古文書

(徳島県海部郡海陽町穴喰 田井家「震潮記」)

原本



表紙

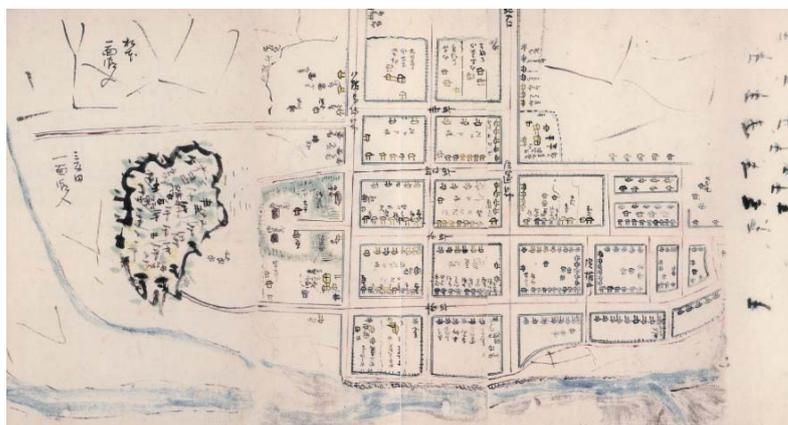


書き出し

現代語訳版



表紙



「穴喰浦荒図面」(部分)

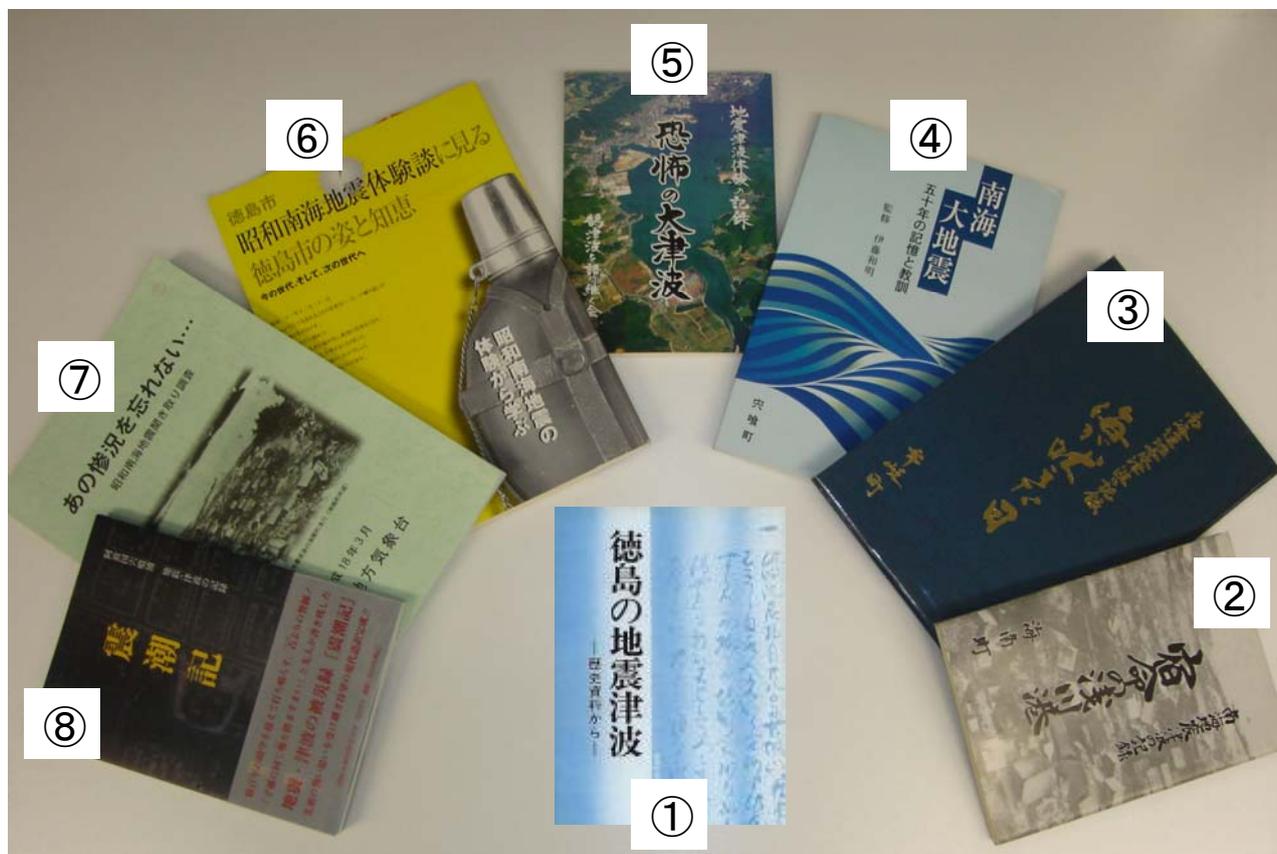
徳島県内には、過去の南海地震に関する各地の被害の様子を知ることができる古文書が残されています。ここでは、その一例として原本と近年現代語訳がなされた穴喰（徳島県海部郡海陽町）に残る「震潮記」を紹介します。

「震潮記」は、当地の元組頭庄屋 田井久左衛門宣辰(1802～1874)が、穴喰を襲った安政南海地震・津波（1854.12.24）の当時の状況を克明に書き残した古文書です。特筆すべきは、この安政の津波に襲われた穴喰の被害の様子を描いた「穴喰浦荒図面」が残されていることです。さらに、穴喰各所の津波の浸水高や遡上した位置、液状化現象、この地震発生前日に発生した安政東海地震(1854.12.23)から約1年以上にわたる大小余震の発生回数なども克明に記録されています。また、穴喰を襲ったそれ以前の地震・津波、すなわち永正(1512)、慶長(1605)および宝永(1707)の様相を記した旧寺などに残る記録の写しも入れられています。

安政の地震・津波から150年余りの月日を経た2007（平成19）年、田井晴代氏によりこの原本の現代語訳版が上梓され、地震・津波に対する防災教育・防災学習に資する優れた教材となっています。

南海地震・津波の記録

(徳島県内で発刊された出版物)



- ① 徳島市民双書・16「徳島の地震津波－歴史資料から－」、徳島市立図書館、1982年
- ② 南海地震津波の記録「宿命の浅川港」、海南町役場、1986年
- ③ 南海道地震津波の記録「海が吠えた日」、牟岐町教育委員会、1996年
- ④ 南海大地震「五十年の記憶と教訓」、徳島県海部郡穴喰町総務部、1996年
- ⑤ 地震津波体験の記録「恐怖の大津波」、鵜津波を語り継ぐ会、2003年
- ⑥ 徳島市「昭和南海地震体験談に見る徳島市の姿と知恵」、徳島市消防局、2003年
- ⑦ 「あの惨況を忘れない...」昭和南海地震聞き取り調査、徳島地方气象台、2006年
- ⑧ 阿波国穴喰浦地震・津波の記録「震潮記」、田井晴代、2006年

徳島県内で発刊された南海地震・津波の記録に関する主な出版物を上の写真に示しています。徳島県では、これまでに南海地震・津波の記録の整理も精力的に行われてきました。①は、徳島の地震津波を歴史史料からまとめられた先駆書、②～⑧は、各地における昭和南海地震・津波の体験集、⑧は前頁で紹介した現代語訳版「震潮記」です。これらの書籍が出版された背景には、地域の悲惨な体験を後世に伝え残したいという思いがあります。

当時の被害の様子が見え、被災者の生の悲痛な声が聞こえてきます。

次の南海地震時の震度・液状化予測

(東南海・南海地震同時発生)

震度

出典:「徳島県地震動被害想定調査報告書」



この図は、徳島県における次の南海地震時の震度の予測結果を示しています。

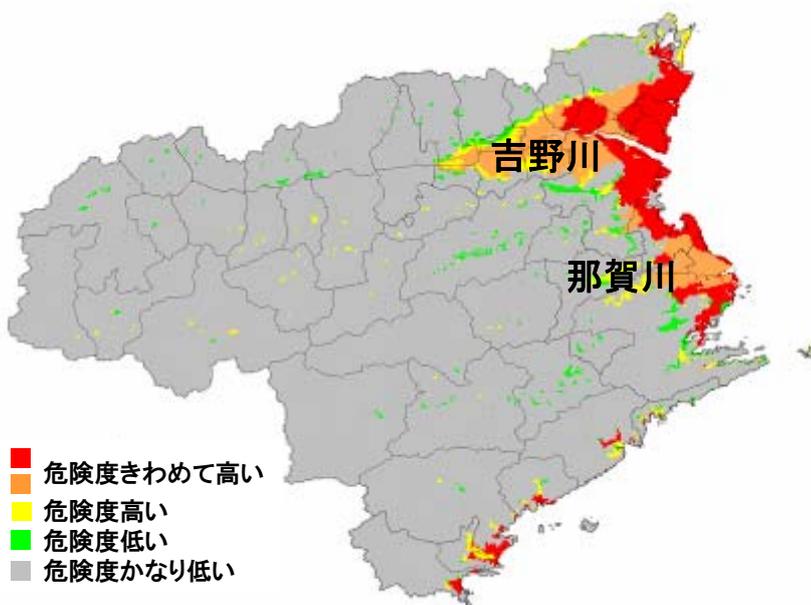
沿岸域の一部の地域で震度6強、県南部や吉野川沿いで震度6弱、山間地で震度5強の揺れが予測されています。

地震動への最も効果的な対策は家屋の耐震化と家具類の固定です。これらは、その後に来襲する津波から避難するためにも必要です。

震度6弱とは・・・人間は立っていることが困難になります。屋内では、固定していない重い家具の多くが移動、転倒します。耐震性の低い木造建物では、倒壊するものがあります。

液状化現象

出典:「徳島県地震動被害想定調査報告書」



この図は、液状化現象による危険度の予測結果を示しています。

沿岸域、特に吉野川や那賀川河口部など沖積平野部、県南部沿岸集落の震度が高い集落で液状化現象の危険度が極めて高くなります。

被災後の早期復旧開始のためにも、道路、橋脚、港湾施設およびライフラインなどへの対策が必要です。

液状化現象とは・・・地震によって地盤が一時的に液体のようになってしまう現象です。埋立地や河口など砂質の地盤で起こり、地盤の上の建物を傾かせたり沈ませたりします。

次の南海地震時の津波予測

(東南海・南海地震同時発生)

第1波到達時間

出典:「平成15年度徳島県津波浸水予測調査報告書」



第1波到達時間とは・・・初期水位から20cm以上上昇するまでの時間と定義しています。

この図は、次の南海地震時の津波の第1波到達時間の予測結果を示しています。

県南の海陽町、牟岐町～美波町では、地震発生後、数分～10分後に第1波が到達します。これらの地域では、地震の揺れが収まりしだい、一刻も早く近くの高いところへ避難すべきです。日頃から複数の避難経路を決めておきましょう。

また、阿南市では約20分後、小松島市では約35分後、徳島市では約40分後、鳴門市では45分後に第1波が到達します。これらの地域でも、まずは地震の揺れから身を守り、その後近くの高いところに避難しましょう。

最大津波高

出典:「平成15年度徳島県津波浸水予測調査報告書」



最大津波高とは・・・満潮時に津波が来襲したときのT.P. (東京湾中等潮位面) 上の高さのことです。

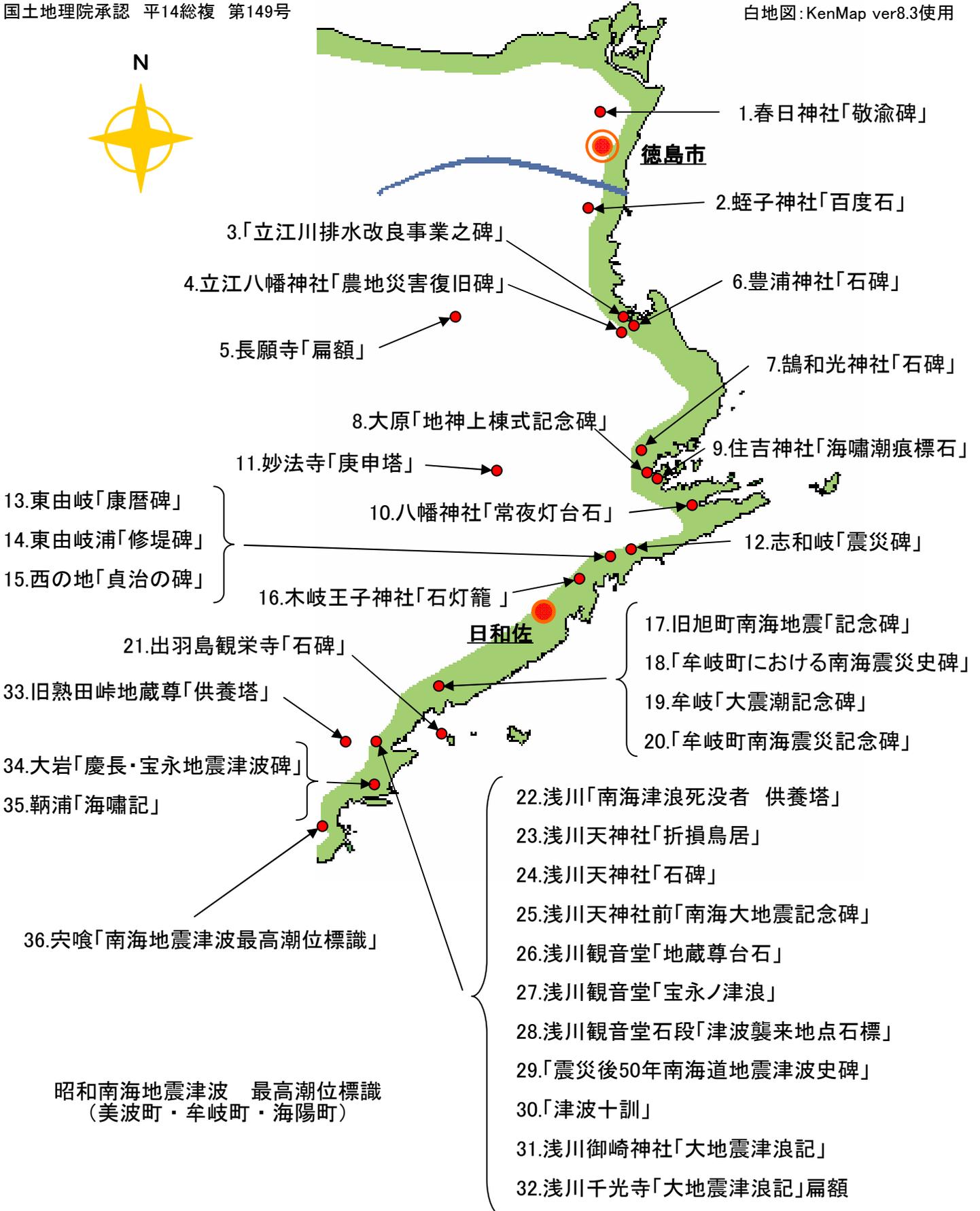
この図は、最大津波高の予測結果です。津波は第1波が必ずしも最大になるとは限らないことに注意が必要です。一方、予測で3波目が最大となっても、第1波目に最大波が来ると考え避難することが大切です。

海陽町～美波町では5～9m、阿南～鳴門市では3～5mの津波が来襲します。どの地域でも日頃から複数の避難経路、避難場所を決めておきましょう。3mの浸水が予測される場合には4階建て以上、2mの浸水では3階以上の鉄筋コンクリート造りの避難ビルへの避難が必要です。

徳島県の地震・津波碑の位置

国土地理院承認 平14総複 第149号

白地図: KenMap ver8.3使用



春日神社「敬諭碑」

(1854年安政南海地震)

所在地 板野郡松茂町中喜来字牛飼野西ノ越30 春日神社境内

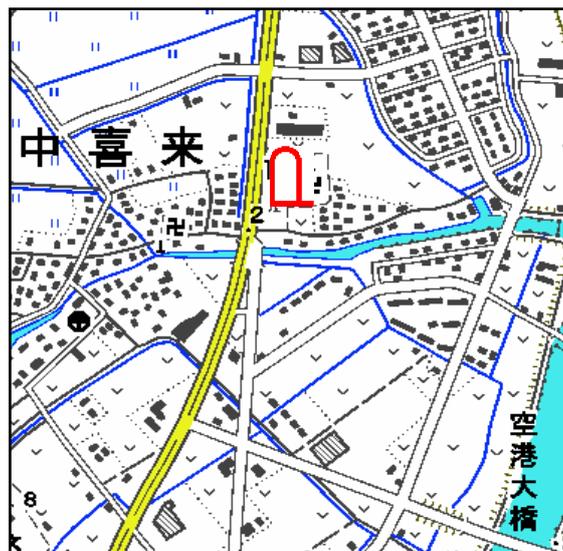
建 立 安政3年(1856)



敬諭碑



中喜来春日神社



板野郡松茂町の国道11号沿いの春日神社境内に、敬諭碑は建っています。「敬諭」には「変をおろそかにしない」という意味があり、安政南海地震(1854.12.24)の様子が漢詩で刻まれています。「山は鳴り大地が揺れ、寺社や人家が多く倒れ、水が噴き出し(液状化現象)、火災も発生、津波により田や桑畑は海のようになった。恐ろしくあの世に陥るくらいの惨状である。さらに、厳しい寒さが骨身に沁み、寝具、食糧も無くて飢えていた。地震の翌日には、人々は疲れ果て、流言を流す者もいたが、被災者のために炊き出しを施す人もいた。余震は翌年になっても続いた。」などと刻まれています。

教訓 海岸近くに住む人は、南海地震が起きれば、地震の大きな揺れ、それに伴う液状化現象や火災の被害ばかりでなく、津波被害にも注意が必要です。このような悲惨な状況の中でも、共に助け合う共助の精神は今でも大切です。

蛭子神社「百度石」

(1854年安政南海地震)

所在地 徳島市南沖洲1-2 蛭子神社境内

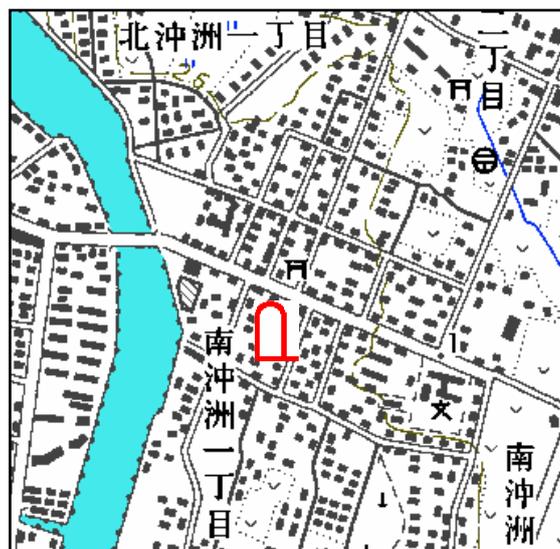
建立 文久元年(1861) 9月 移転 平成15年(2003) 3月3日



百度石



蛭子神社



徳島市南沖洲の新しい蛭子神社境内に移転された百度石に、安政南海地震(1854.12.24)の様子が刻まれています。砂岩の劣化が激しく、現在では4面のうち2面は剥落しています。「大地震に驚いた人々は、竹藪に逃げ込んだ。津波が来ると騒いで、驚いて船で逃げようとして船が転覆し、命を失った人がいた。津波の際には絶対船に乗ってはいけません。また、家が倒壊し炬燵(こたつ)や竈(かまど)からの出火することも多かったのもので、そのような時には、冷静になって火を消すことも肝心である。百年が経つ頃にはこのような大地震が起きるので気を付けよ。」などと刻まれていました。

教訓 南海地震はおよそ100年周期で繰り返し起きています。大地震が起きた時には、冷静に火を消すこと。また、津波の際には、絶対に船に乗って避難してはいけません。

「立江川排水改良事業之碑」

(1946年昭和南海地震)

所在地 小松島市赤石町3番 立江川排水機場敷地内

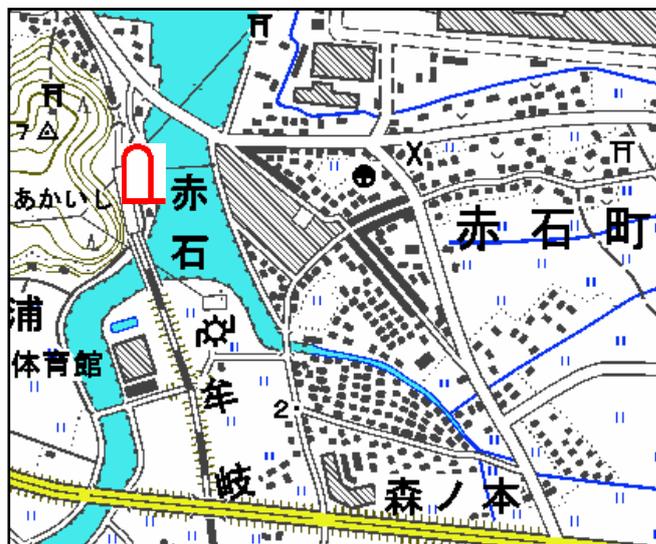
建立 昭和53年(1978)6月吉日



前面



背面



小松島市赤石町の阿波赤石駅横の立江川排水機場敷地内に、昭和南海地震(1946.12.21)により地盤沈下が起き、そのために生じた塩水や雨水の冠水被害対策として行われた排水改良事業の碑が建てられています。

教訓 地震時の地盤沈下による大規模な農地冠水塩害対策には、排水機、樋門、排水路の整備等のハード対策も必要です。

立江八幡神社「農地災害復旧碑」

(1946年昭和南海地震)

所在地 小松島市立江町新開18 八幡神社境内

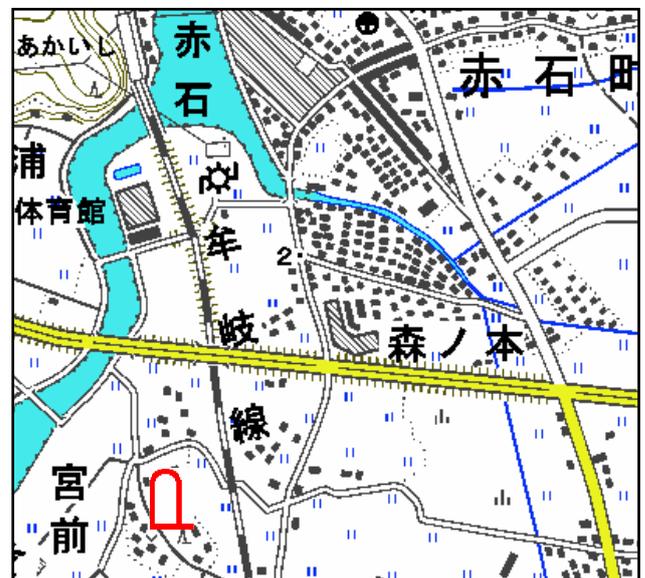
建 立 昭和42年(1967)2月



農地災害復旧碑

小松島市立江町新開の八幡神社境内に、昭和南海地震(1946.12.21)後の農地災害復旧事業を後世に伝える「農地災害復旧碑」があります。「大地震に起因する地盤沈下により立江町の水田40町歩が、悪水の滞留のため不毛の地と化した。災害後、農地改良復旧事業として昭和27年3月に着工、総工費3,300万円の巨費を投じて昭和31年3月に竣工した。」などと刻まれています。

教訓 南海地震の発生により、地盤沈下が起き、冠水した水が長期間滞留、農地などに被害が出ることがあります。排水施設の整備も必要となります。



長願寺「扁額」

(1854年安政南海地震)

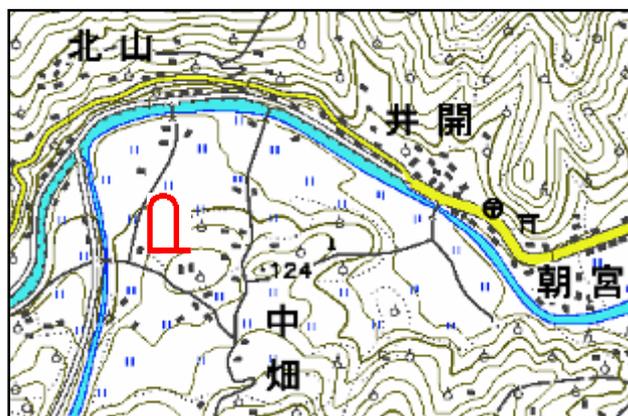
所在地 名東郡佐那河内村上字久保井101 長願寺

奉納 不詳



扁額

佐那河内村から神山町に抜ける新しいバイパスの近くに、新装なった長願寺があります。ここには、蜂須賀家の家老賀島家の大書院に使われていた戸板で作られた「扁額」に、安政南海地震(1854.12.24)の様子が記されています。それには、後世の人が忘れないように、「大地震で多くの家屋が倒壊、津波により海辺の家屋が流出、徳島城下や小松島では大火災が発生し、数千戸の家屋が焼失した。」などと記されています。



教訓 安政南海地震で、徳島県下で死者が最も多かったのは徳島市です。当時の徳島城周辺は人口が多く、家屋も集中しており、地震後に各所で発生した火災により、死者73名、負傷者131名を出しています。家屋が密集している地域では、地震時に火災への備えをおろそかにしてはなりません。

豊浦神社「石碑」

(1854年安政南海地震)

所在地 小松島市赤石町97 豊浦神社境内

建 立 不 詳



石碑

小松島市赤石町にある豊浦神社南入口の鳥居の右に、青石に達筆な文字で刻まれた安政南海地震（1854.12.24）の碑が建っています。「この地震による津波により、徳島県下でも多くの死者を出したが、豊浦近郊の村人は、小高いこの神社の庭に避難し、難を逃れたのは白楽天のおかげ。」と刻まれています。この神社の祭神の白楽天は、地元では、「はくろくさん」と呼ばれています。また、この地震時に白い鹿「白鹿（はくろく）」が現れ住民をこの境内に導き住民を助けたという言い伝えも残っています。



教訓 この神社は今では高所とは言えませんが、津波来襲の恐れが少しでもある時は、一刻も早く近くの高い所へ避難することが大切です。

鸛和光神社「石碑」

(1946年昭和南海地震、1960年チリ地震津波)

所在地 阿南市橋町青木 和光神社段脇

建立 平成4年(1992)10月10日

阿南市橋町青木にある和光神社の階段脇に、高さ3m余りの「津波碑」が平成4年に建てられました。この碑には、「鸛地区ではおよそ100年毎に襲われた過去の地震津波の歴史が示され、平常時にそのことを心に留めるよう」戒めています。この碑には1946（昭和21）年の南海地震津波と1960（昭和35）年のチリ地震津波の浸水高が刻まれ、住民が常にその高さを実感できるようになっています。

教訓 V字型湾の湾奥部では、津波エネルギーが集中、大津波に襲われる危険性が高く、橋湾奥地区では宝永地震（1707.10.28）時の津波でも大被害を受けています。また、南海地震のような近地津波ばかりでなく、17,000kmも離れたチリ沖で発生した遠地津波でも被害の恐れがあることも知っておく必要があります。



和光神社



1946年 昭和南海地震津波潮位

1960年 チリ地震津波潮位



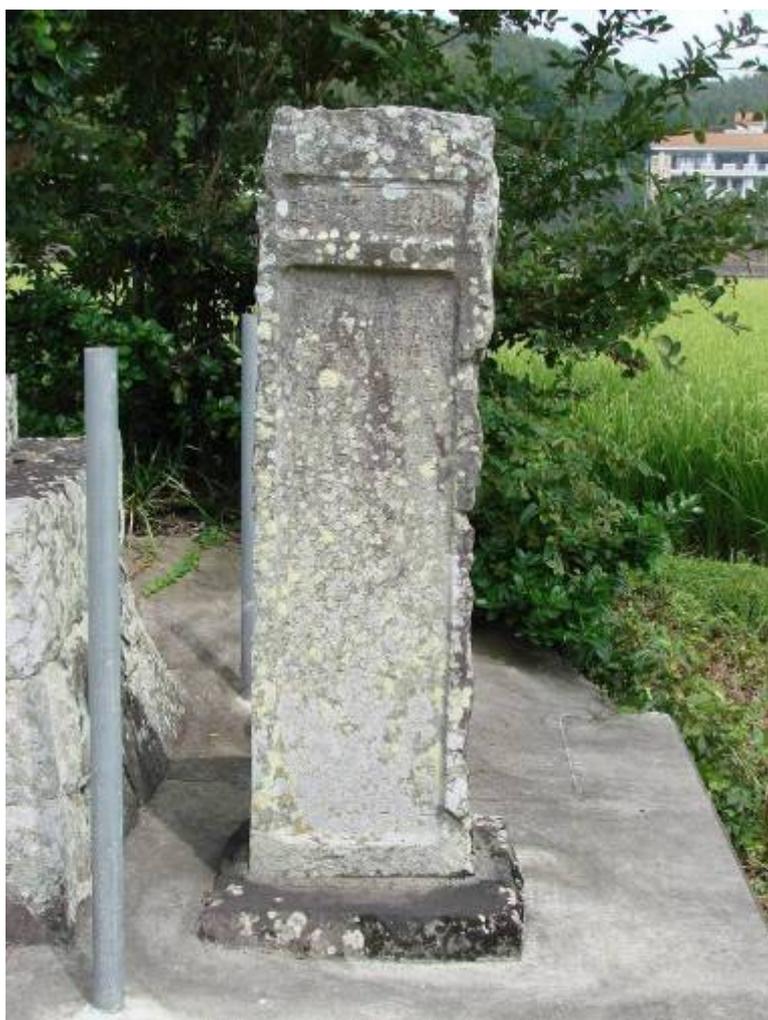
石碑

大原「地神上棟式記念碑」

(1946年昭和南海地震)

所在地 阿南市福井町大原116-1 大原集会所西

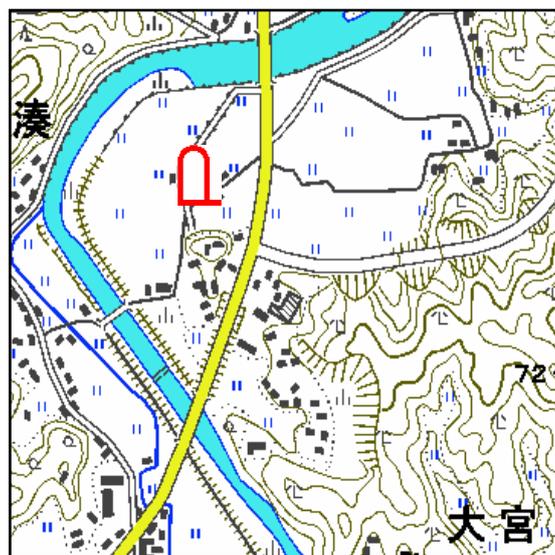
建 立 昭和23年(1948) 12月21日



地神上棟式記念碑



震災碑



阿南市福井町大原の国道55号線近くの大原集会所西に、昭和南海地震(1946.12.21)からちょうど2周年目に建てられ、当時の被害の様子を記した「地神上棟式記念碑」があります。そこには、「南海地震発生とともに大津波が福井村を襲い、海岸地の一帯が泥海になった。大原平野の田畑は砂礫で覆われてしまった。」などと刻まれています。

教訓 津波に襲われた田畑は、塩害を受けるばかりでなく、砂礫の堆積により長期間使用不可能となり、農業への被害は甚大です。また、沿岸域の湿地や河川は環境上も貴重で多様な生態系が育まれている場でもあり、環境保全面からも大津波による被害防止対策を急ぐことが必要です。

住吉神社「^{かいしょう}海嘯潮痕標石」

(1946年昭和南海地震)

所在地 阿南市福井町浜田162 住吉神社段脇

建立 不詳



海嘯潮痕標石



住吉神社



阿南市福井町浜田（旧後戸）の住吉神社の階段脇に、「海嘯潮痕標石」が建っています。ここには、「昭和21年(1946)12月21日の夜明けに大地震。大音響と共に津波が来襲、最初の波は、住吉神社の石段第6段目まで、一旦退き、間もなく再来、2番目の波は10段目まで。この大津波により、大戸、後戸、赤崎、大原、湊、大西、吉津、大宮、山下、宮宅まで泥海となった。津波は約半時間後に退いた。負傷者3名、家屋13棟、船10艘および家畜を流失、床上浸水197戸、衣食もほとんど流失、大変困った。」などと刻まれています。

教訓 津波は数回、長時間にわたり押し寄せます。必ずしも第1波が最大になるとは限らず、2波目や3波目が大きくなることもあるので注意が必要です。すなわち、高い所へ避難した後は、半日もしくは津波警報が解除されるまで、自宅へ物を取りに帰ったり、海の様子を見に行くなどの行為は禁物です。

八幡神社「常夜灯台石」

(1854年安政南海地震)

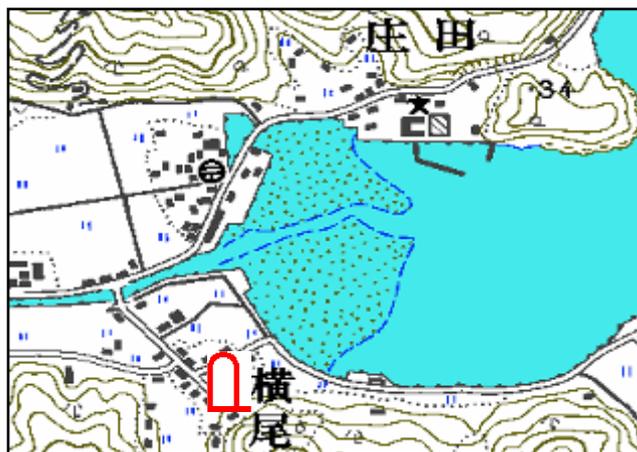
所在地 阿南市椿町浜1 八幡神社鳥居前

建立 安政3年3月8日(1856.4.12)



常夜灯

阿南市椿町浜（旧横尾）の八幡神社鳥居前にある2基の「常夜灯台石」に、安政南海地震（1854.12.24）時の津波来襲の様子が刻まれています。それによると、「安政南海地震の前日に起きた安政東海地震（1854.12.23）に伴う津波が堤防を越え、川筋の奥深くまで浸入した。翌日、午後4時頃の安政南海地震の大揺れが続くなか、午後6時頃に見上げるばかりの大津波が来襲、多くの家屋や田畑に被害を出したものの、老人・子供を素早く避難させたため幸い死者はなかった。」などと刻まれています。



教訓 幼児、高齢者、外国人など援護を要する者には、特に素早い避難補助ができる体制を整えておくこと。もちろん、事前に家族や地域で避難体制を十分整えておくことが大切です。

妙法寺「^{こう しん とう}庚申塔」

(1854年安政南海地震)

所在地 那賀郡那賀町谷内下傍示94 妙法寺境内

建 立 安政5年(1858)



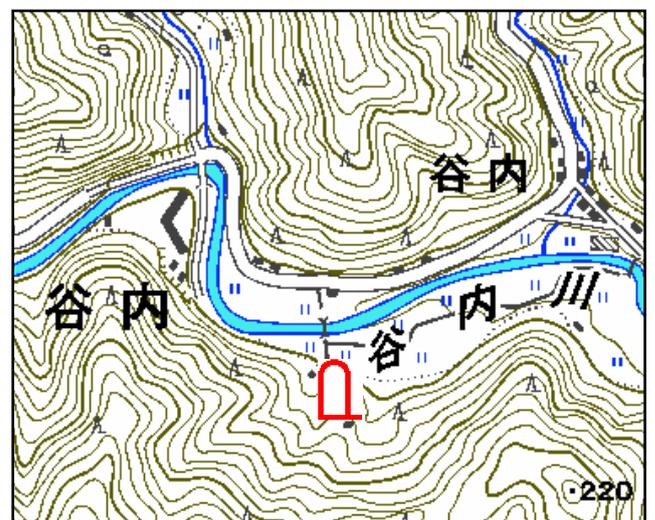
前面



側面

那賀町（旧相生町）谷内の妙法寺は、那賀川中流の支流谷内川の山合にあります。現存する「庚申塔」は安政南海地震(1854.12.24)により損壊したため、1858年に再建されたものです。海岸から20kmも離れた山間部で石塔が損壊したということは、この地は震度5以上の揺れに襲われたことを意味します。

教訓 次の南海地震の揺れの大きさは、この安政南海地震と同じかそれ以上といわれています。沿岸域ばかりでなく、中山間地の住民も、地震対策を怠らないことが大切です。



志和岐「震災碑」

(1854年安政南海地震)

所在地 海部郡美波町志和岐字田井ヶ浦89 志和岐公民館前

建 立 文久2年(1862)9月



震災碑

美波町（旧由岐町）の志和岐公民館の前に、安政南海地震(1854.12.24)の津波による被害を四面に刻んだ碑が建っています。そこには、「嘉永7年11月4日(1854.12.23)午前10時頃安政東海地震があり、大津波が押し寄せ、住人は家財を寺や高台に運んだ。翌5日(1854.12.24)午後4時頃に安政南海地震の後、すぐに津波が押し寄せ、海辺の家は残らず流失したが、犠牲者はなかった。大地震の後には津波が来るので、油断しないようにと子孫に伝えよ。」などと刻まれています。



教訓 津波による浸水が予測される地域では、家屋の流失対策も考慮する一方、早急に津波からの避難を図ることを、子孫に伝えなければなりません。

東由岐「^{こうりゃくひ}康暦碑」

(1361年正平南海地震)

日本最古の津波碑

所在地 海部郡美波町東由岐大池イヤ谷

建立 康暦2年(1380)11月



康暦碑

美波町（旧由岐町）東由岐大池の南岸の小さな谷に、わが国最古の津波碑といわれる正平16年6月24日（1361.8.3）に発生した南海地震津波の供養碑「康暦碑」があります。『太平記』にも「阿波の雪（由岐）の湊を襲った津波」として記されており、この碑は、20年後の康暦2年(1380)に建立されたものです。

教訓 わが国最古の津波の供養碑が徳島に現存しています。災害文化を継承し、「私たちは、二度と津波災害に遭わないよう心がける」という誓いの碑としなければなりません。



東由岐浦「修堤碑」

(1854年安政南海地震)

所在地 海部郡美波町東由岐大池101-1 東由岐公民館前

建 立 大正2年(1913) 9月



修堤碑

美波町（旧由岐町）東由岐公民館の前に、大正元(1912)年9月22日の台風で決壊した堤防の修復記念碑にも、安政南海地震（1854.12.24）時の津波の記述が見られます。「安政南海地震時には、長円寺の下まで津波が来襲、堤防は破壊され、村内の家屋が140戸流出、残ったのはわずか10余戸、多数の死傷者が出た。」などと刻まれています。



教訓 現在では高い堤防に守られていますが、大地震時には揺れや液状化、津波などで破堤されることもあります。ハード面の対策だけでなく、避難などのソフト面の対策も合わせて考え、被害軽減に努めなければなりません。

西の地「貞治の碑」^{じょうじ}

(1361年正平南海地震)

所在地 海部郡美波町西の地字東地 子安地蔵堂内

建立 貞治6年6月24日(1367.7.29)



貞治の碑

美波町（旧由岐町）西の地字東地の道路の奥に、正平南海地震（1361.8.3）の犠牲者供養のために地蔵尊を刻んだ貞治6年(1367)の銘が入った石（「貞治の碑」と呼ばれる）が、子安地蔵堂内にあります。1854年の安政南海地震の際に、浜の堤防のなかで異様な光を放つこの石を見た地元の信仰厚い人たちがここに移しお祀りしたと伝えられています。

教訓 地震・津波の犠牲者を供養するため、地蔵尊を刻み残した先人の想いを理解し、この地が再び災害に遭わないよう地域住民各自が努力しなくてはなりません。



木岐王子神社「石灯籠」

(1854年安政南海地震)

所在地 海部郡美波町木岐南白浜191-2 王子神社

建立 不詳



石灯籠

美波町（旧由岐町）木岐地区の南白浜の王子神社横の堤防沿いの木立に埋もれた石灯籠の側面に、安政南海地震（1854.12.24）の様子が刻まれています。それには、「午後4時の大地震のあと、1時間内に大津波が3度押し寄せ、高さ約12mを越える津波で家屋もこの神社も流失した。」などと刻まれています。



教訓 津波は何度も押し引きを繰り返します。このような巨大津波では、全ての家屋は破壊され、流失します。そのうえ、尊い生命を奪われないためにも、早く近くの高いところへ避難することを心がけなければなりません。

旧旭町南海地震「記念碑」

(1946年昭和南海地震)

所在地 海部郡牟岐町灘字大牟岐田 児童公園内

建 立 昭和24年(1949)10月28日



記念碑

牟岐町灘字大牟岐田の児童公園内に、昭和南海地震（1946.12.21）の記念碑があります。当初、牟岐町旧旭町にあったものを、昭和南海地震から50周年記念にあたる平成8年(1996)にこの地に移転しています。碑には、「昭和南海地震後、工費95万円、延べ5,720名、10ヶ月をかけて後世の災厄に備えるための地盤埋立事業を行った。旧名坊小路を旭町と改称した。」などと刻まれています。また、「大地震の直後には、津波が襲う」と警鐘を鳴らしています。



教訓 大地震の後には地盤沈下が起き、そこへ津波が来襲するため、被害はさらに大きくなります。この地域は、津波到達時間が短く、地震の揺れが治まり次第、直ちに避難を開始することが必要です。

て ぼ じま 出羽島観栄寺「石碑」

(1854年安政南海地震)

所在地 海部郡牟岐町大字牟岐浦字出羽島 観栄寺境内

建立 不詳 再建 昭和3年(1928) 12月



旧碑



再建碑

牟岐沖出羽島の観栄寺階段を上りきった境内左の植え込みの中に旧碑が、本堂正面に向かい合う形で再建碑が建っています。碑には、「安政東海地震(1854.12.23)当日の午前8時にこの島でも6m程度潮が上下し、翌日(1854.12.24)、午後4時の安政南海地震発生時にも同程度の津波が来たが、島民は前日より山の上に避難していて無事であった。」などと刻まれています。



教訓 前日の安政東海地震による潮の変調に気づき山へ避難していたため、翌日の南海地震の津波から助かった例が各地で見られます。津波に対しては、早く近くの高いところへ避難し、半日程度は下山しないことが必要です。

浅川「南海津浪死没者 供養塔」

(1946年昭和南海地震)

所在地 海部郡海陽町浅川字大田

建立 昭和42年(1967)12月21日



南海津浪死没者 供養塔

昭和南海地震（1946.12.21）時の津波による犠牲者の名前を刻んだ供養塔が浅川の弥勒菩薩の像のある小高い丘の一角に昭和42年、地元の「みろく会」によって建てられています。

教訓 地震・津波などの自然災害により犠牲者を出した家族にとっては、いつまでも不幸な記憶を忘れることはできません。津波の襲来を受ける宿命の地こそ、過去の災害の記憶を風化させてはなりません。

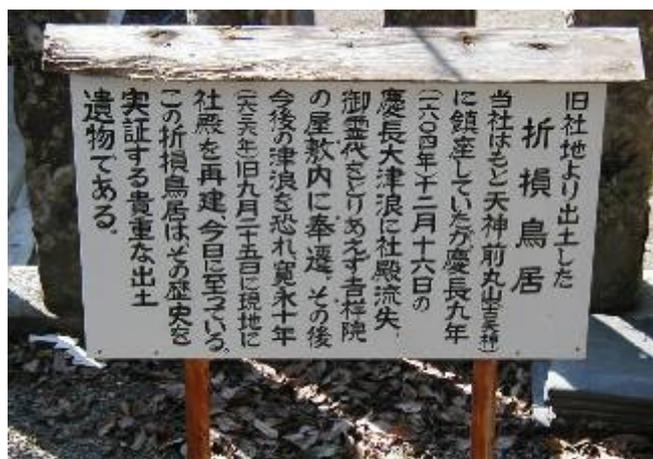


浅川天神社「折損鳥居」

(1605年慶長南海地震)

所在地 海部郡海陽町浅川字大田34 天神社境内

移 転 不 祥



説明板



折損鳥居



天神社

海陽町浅川字大田の天神社の境内に、旧社地より出土した折損鳥居の一部が置かれています。説明板には、「天神社は、もと天神前丸山（古天神）にあったが、慶長南海地震（1605.2.3）時の大津波により流失、御霊代を一時吉祥院の屋敷内に奉還後、寛永10年(1636)に現地に社殿を再建した。」と書かれています。慶長地震津波の遺物は他にみられない貴重な史料です。



教訓 この地は、慶長時代以降も宝永、安政、昭和の南海地震による津波被害を受けてきました。この遺物を、「今後、これ以上、津波被害を受けさせない地域とする」という「住民の誓いのしるし」にすべき宝物です。

浅川天神社「石碑」

(1854年安政南海地震)

所在地 海部郡海陽町浅川字大田34 天神社境内

建立 慶応3年(1867)4月 再建 平成6年(1994)11月4日

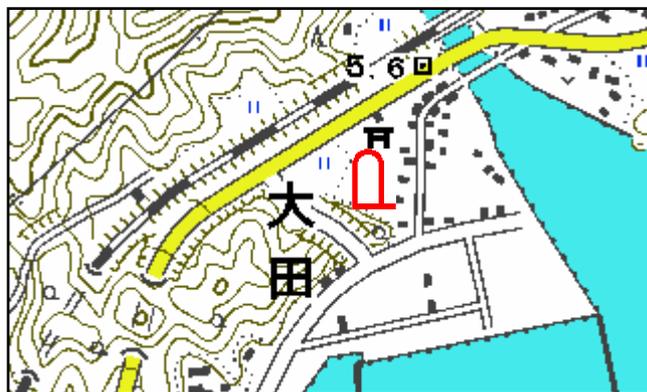


旧碑



再建碑

浅川大田の天神社境内には、碑文が読めなくなった安政南海地震(1854.12.24)の碑と碑文がわかるように再建した2つの碑があります。「安政南海地震の前日(1854.12.23)、安政東海地震が起き、その日の午前10時頃、浅川では海水が道路に溢れ、住民は山へ避難した。翌日(1854.12.24)、午後4時大地震、約9mの津波により、天神、大歳、御崎の3神社、江音、千光、東泉の3寺以外は人家全て流失した。幸い村内には怪我人は出なかった。」などと刻まれています。



教訓 神社や寺以外は全て流失したものの、山へ避難した人々は津波が収まるまで下山しなかったため、この地では犠牲者が出なかったことを教訓として忘れてはなりません。碑文を蘇らせ、現代に傳承することも大切です。

浅川天神社前「南海大地震記念碑」

(1946年昭和南海地震)

所在地 海陽町浅川字大田34 天神社境前

建立 昭和31年(1956)12月



南海大地震記念碑



天神社



昭和南海地震（1946.12.21）で徳島県内最大の犠牲者を出した浅川の天神社前の広場に、10周年記念に建立された「南海大地震記念碑」があります。「21日午前4時19分に大地震、震後10分余りで津波が来襲、第1波の高さ約2.7m、第2波約3.6m、第3波約3.3mを記録した。死者85名、傷者80名、流家流失185戸、全壊161戸、半壊169戸に及んだ。その他、船舶漁具家財および農作物も多数流失した。終戦後の物資不足の時世に多方面から援助を受けたことへに感謝する。」などと刻まれています。

教訓 天神社には、慶長、宝永、安政、昭和の地震に関する記念碑があります。これほど多くの碑が残されている浅川の人達は、次の南海地震時には犠牲者をなくすこと、それが先人に対する義務と考えなければなりません。

浅川観音堂「地藏尊台石」

(1707年宝永地震)

所在地 海部郡海陽町浅川字イナ 観音堂境内地藏堂

建 立 正徳2年(1712)7月

地図は次頁参照



地藏尊



地藏尊台石



地藏尊扁額

海陽町浅川字イナの浅川湾を見下ろす小高い丘の観音堂地藏尊台石に、わが国最大級の東海・東南海・南海地震が同時に起きた宝永地震（1707.10.28）時の津波の様相が刻まれています。それには、「午後2時頃、大地震、その後9mの津波がカラウト坂の麓まで上がり、引き潮により千光寺以外はすべて流失、140余人の犠牲者を出した。」などと刻まれています。今では台石の文字は上半分しか見えず、その銘文を扁額に書き示しています。

教訓 この浅川には、慶長津波の天神社鳥居の遺物、宝永津波のこの供養地藏尊があり、その後の1854年安政南海、1946年昭和南海地震津波でも大きな被害を受け多くの碑が建てられています。この丘に立てば、浅川湾の湾口に津波防波堤が見えます。しかし、津波防波堤だけに頼らず、地震時には家具の倒壊を防ぎ、屋外への脱出など避難態勢を整えておくことが大切です。

浅川観音堂「宝永／津浪」

(1707年宝永地震)

所在地 海部郡海陽町浅川字イナ 観音堂境内

建立 平成11年(1999)3月



宝永ノ津浪

浅川イナの観音堂内にある地藏尊台石の碑文を、より多くの人に知らせるために、平成11年(1993)3月、境内に新しい石碑が建てられました。

教訓 住民各自が津波災害対策を考えるためにも、過去の生の資料を提示することは、防災意識の向上に役立ちます。



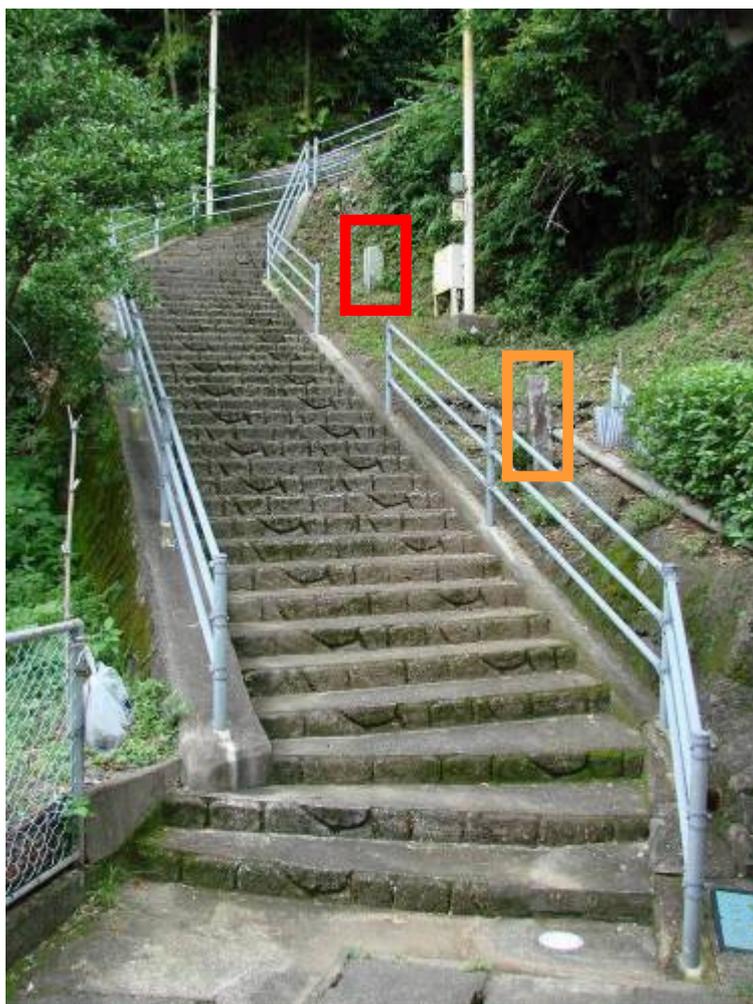
浅川観音堂石段「津波襲来地点石標」

(1854年安政南海地震、1946年昭和南海地震)

所在地 海部郡海陽町浅川字イナ 観音堂石段

建立 不詳

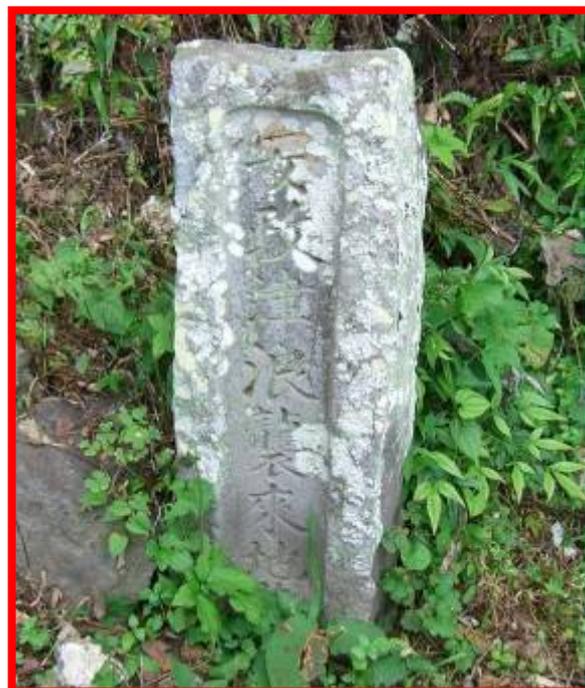
地図は前頁参照



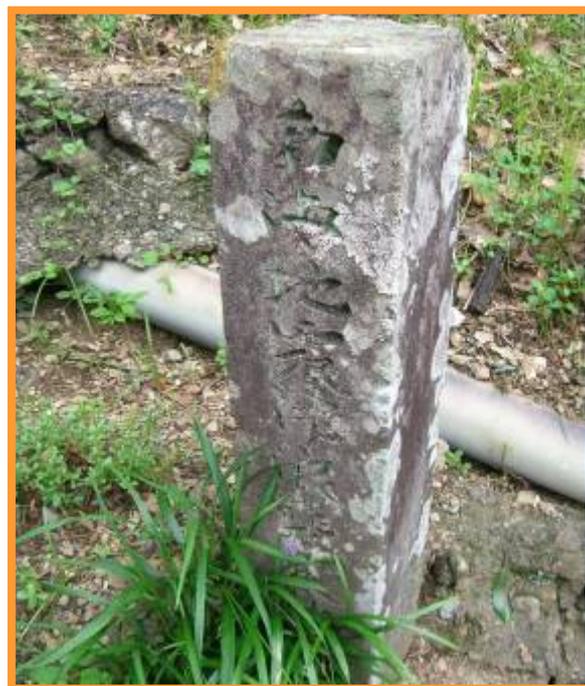
浅川観音堂石段

浅川の観音堂に至る石段脇に、安政南海地震（1854.12.24）時および昭和南海地震（1946.12.21）時それぞれの津波の到達点を示す石標が建てられています。それぞれの石標から、安政の津波は6.4m、昭和の津波は4.1mの高さにもなっています。自分の目線をその位置に合わせ、石段反対側の家の高さと比較して下さい。津波の恐ろしさが実感できるはずですよ。昭和の津波は、安政の津波よりもはるかに小さかったことも一目瞭然です。

教訓 津波高を示す石標は、地域の防災意識を高める無言の教科書になります。



安政南海地震津波襲来地点石標



昭和南海地震津波襲来地点石標

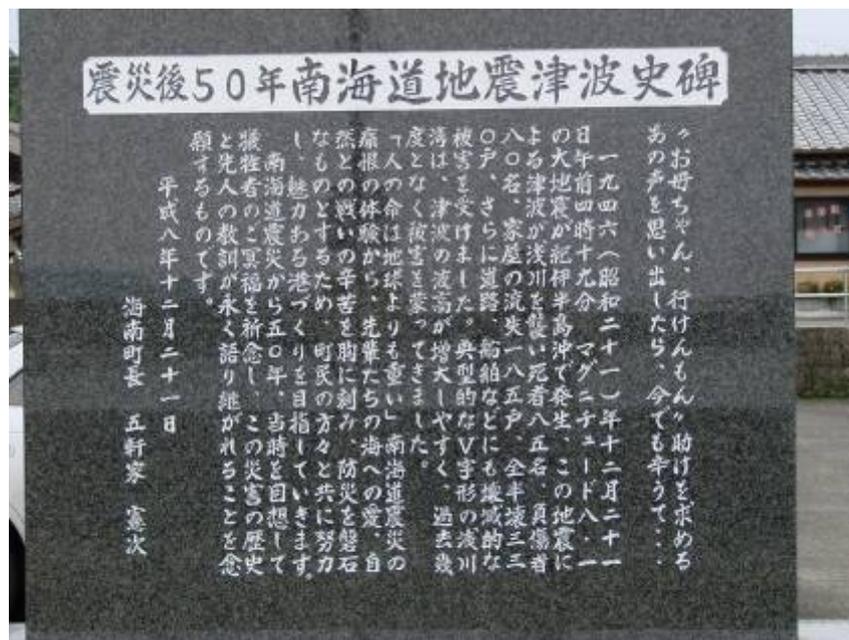
「震災後50年南海道地震津波史碑」

(1946年昭和南海地震)

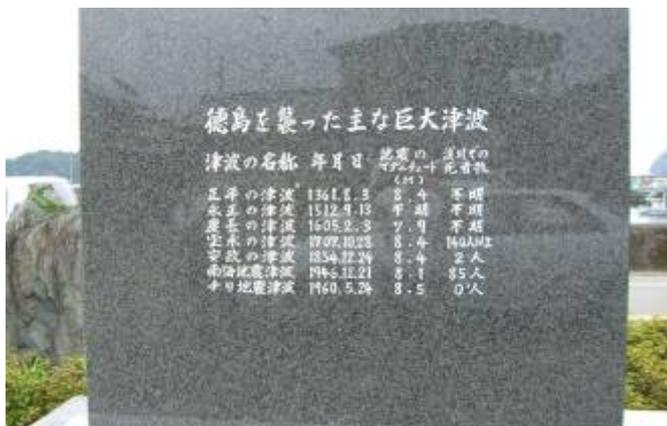
所在地 海部郡海陽町浅川字川ヨリ東26-4 海南庁舎浅川出張所前広場

建立 平成8年(1996)12月21日

地図は次頁参照



震災後50年南海道地震津波史碑



背面



並列する昭和南海地震津波に関する碑

海陽町海南庁舎浅川出張所前広場に、昭和南海地震(1946.12.21)の新しい記念碑が2基並んで建っています。「震災後50年南海道地震津波史碑」は、当時を回想して85名の犠牲者の冥福を祈念し、碑の背面に繰り返された津波の歴史と先人の教訓が永く語り継がれることを願って、平成8年(1996)12月21日に建てられたものです。

教訓 この碑に刻まれた「被災の歴史を風化させてはならない」、その歴史を通じて「一人一人の命は地球よりも重い」ことを肝に銘じ、日頃から住民各自が高い防災意識を持つべきことをこの碑は教えています。

「津波十訓」

(1946年昭和南海地震)

所在地 海部郡海陽町浅川字川ヨリ東26-4 海南庁舎浅川出張所前広場

建立 平成8年(1996)12月21日



津波十訓



昭和南海地震津波の最高潮位標識



「震災後50年南海道地震津波史碑」の横に、津波に対する心構え「津波十訓」が刻まれています。それには「地区内に建てられた多くの昭和南海地震津波の最高潮位標識よりも高い津波もある、最小限の持ち出し品の準備、避難路・避難場所を決めておく、津波の前に潮が引くとは限らない、避難は早く近くの高いところへ、船の移動方法」などに関する教訓が述べられています。

教訓 十訓に学び、住民一人ひとりが自分の地域の弱点をよく知り、その地域に応じた津波への対応をとることが大切です。

浅川御崎神社「大地震津浪記」

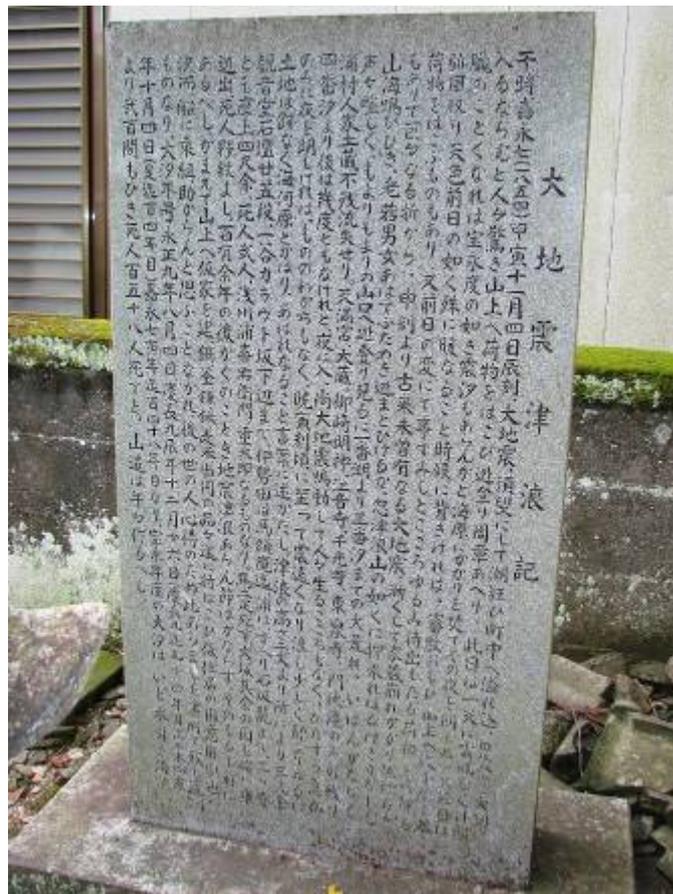
(1707年宝永地震、1854年安政南海地震)

所在地 海部郡海陽町浅川字川ヨリ西 御崎神社境内

建立 明治34年(1901)11月 再建 平成8年(1996)



旧碑



再建碑

浅川の御崎神社境内には、千光寺の「大地震津浪記」扁額に記された文章に、宝永地震（1707.10.28）時の死者数185人などを付け加えた石碑が、明治34年(1901)に建てられています。風化が激しく碑文が読み取れないため、平成8年(1996)に復元した再建碑が境内の別の位置に建てられました。

教訓 石碑に刻まれた文字は風化しても、そこに記された教訓は風化させてはなりません。新しく誰もがわかる形で蘇らせた再建碑から地域の災害史を学ぶことが大切です。



浅川千光寺「大地震津浪記」扁額

(1854年安政南海地震)

所在地 海部郡海陽町浅川字川ヨリ西166-3 千光寺本堂内

奉納 文久元年(1861) 6月



大地震津浪記

浅川の千光寺本堂内に、安政南海地震(1854.12.24)の6年後に奉納された浅川の当時の様子記した「扁額」があります。そこには、「安政南海地震の前日に起きた安政東海地震津波の浅川への影響や住民の行動、当日の津波で浅川では、一部の神社や寺院を除く集落全域が流失した。津波は6～9mにも這い上がり、観音堂石段25段、高台の3ヶ寺(江音寺、千光寺、東泉寺)でも座上1.2mも浸水した。また、大阪などでは、船に乗って逃げたために多くの死者が出た。」などと記されています。



教訓 「約100年後にはまた大地震が起きる、そのため仮住居の用意をする、津波に対し船で逃げてはならない」など多くの教訓が記されています。

ずく だ 旧熟田峠地蔵尊「供養塔」

(1854年安政南海地震)

所在地 海部郡海陽町熟田 熟田峠旧山道

建立 不詳



供養塔

山を切り裂いた熟田の新道に沿って、草深い旧道に分け入った道端に、高さ50cm程の地蔵尊を刻した石塔があります。もともと、安政南海地震津波（1854.12.24）による大里村の被災状況を後世に伝えるため、人の目に触れやすい峠に供養塔を建てられていました。この側面には、「宝永地震（1707.10.28）より安政南海地震まで148年目。安政南海地震の前日の安政東海地震が起きた午前8時頃、潮が町中に溢れ込み、当日の午後4時に大地震とともに、約9mの津波が押し入った。住民は山へ逃げ登り、海辺の人家は流失、一面は荒野となった。」などと刻まれています。先人の意思を生かすためにも、石塔を人の目に触れる新道路脇などに移し、碑文を示すなどの措置も考えられます。



教訓 新道の開通により、誰も目につかない旧道に地蔵尊は埋もれています。犠牲者の供養と先人の意志を生かすことを考えなければなりません。

大岩「慶長・宝永地震津波碑」

(1605年慶長地震、1707年宝永地震)

所在地 海部郡海陽町鞆浦字北町

建立 慶長碑：寛文4年(1664) 宝永碑：不詳



慶長碑(左)および宝永碑(右)大岩の碑

海陽町鞆浦漁港近くの大岩に、慶長南海地震(1605.2.3)(向って左)と宝永地震(1707.10.28)(同右)の碑文が刻まれています。慶長の碑面には、「南無阿弥陀仏と中央上面に文字が刻まれ、その下に、午後10時に30mの津波が来襲、100余名の犠牲者が出た。」などと刻まれています。一方、宝永の碑面には、「午後2時頃、約3mの津波が3度来襲したが、犠牲者はなかった。」などと刻まれています。この慶長の津波碑は、四国で地震・津波の様子が記された最古の碑です。



教訓 地震・津波の様子が記された最古の碑が鞆浦の集落にあることは、この地域の文化の高さを示すもので、先人の誇りを受け継ぎ、徳島県南地域が、日本一津波被害がない地域となるよう努力すべきです。

靱浦「海嘯記」^{かいしょう}

(1854年安政南海地震)

所在地 海部郡海陽町靱浦字立岩 海部川旧河道沿い

建立 昭和2年(1927)5月1日



海嘯記



津波避難施設(靱浦山下地区)



靱浦漁港から海部川の旧河道沿いに、安政南海地震(1854.12.24)時の津波の様相を記した「海嘯記」が建っています。この碑には、「午後4時頃に起きた地震による津波は、多善寺の門前、脇宮まで来た。人々はあわてふためき近くの山々へ逃げた。津波は夜半までに4~5回あり、余震は夜明けまでに30~40回も続いた。津波の高さは、他の地域では6~9mにもなったが、靱浦では3~6mであった。建物被害も少なく、けが人もなかった。」などと刻まれています。

教訓 この狭い靱浦の集落には、慶長、宝永、安政の津波碑が存在します。過去の津波の実態を知り、現在までの地形や土地利用変化も考えながら、被害を最小化する知恵が必要です。避難場所の少ない山下地区には、現在立派な避難所が造られています。

穴喰「南海地震津波最高潮位標識」

(1946年昭和南海地震)

所在地 海部郡海陽町穴喰浦 弁天山登り口

建立 平成8年(1996)9月



南海大地震津波最高潮位標識



古目大師堂



海陽町穴喰は、古文書によれば永正の津波（1512.9.13）、慶長、宝永、安政、昭和の津波で大被害を受けてきたことがわかっています。しかし、石碑や扁額といった形では残されていません。穴喰浦弁天山登り口（古目大師堂の対面）に、昭和南海地震(1946.12.21)の津波最高潮位を示す標識が避難所の看板と並んで建てられています。

教訓 穴喰における安政南海地震津波の高さなどは、この地の旧家の古文書に残され、昭和南海地震津波よりもさらに大きかったことがわかっています。それらを次の南海地震津波の防災対策に生かすことが望まれます。

南海地震津波「最高潮位標識」

(1946年昭和南海地震)



美波町 西由岐 公民館前



美波町 西の地 由岐保育所前



海陽町 浅川 天神社前



海陽町 浅川 御崎神社前



牟岐町 灘 大牟岐田



牟岐町 蛭子神社横

徳島県南部の地域では、昭和南海地震(1946.12.21)による津波の最高潮位を示す標識(石柱、電柱、壁面の印)が各所で見受けられます。こうした津波高を示す標識は、それを日頃眺めるだけで津波の脅威を無意識に感じ、「**防災意識を高める無言の教科書**」といえます。